



施設内で迷った時に回廊から中庭を見渡すと、どこからでも視界に入り自分のいる位置がわかる、鮮やかなブルーにペイントされた中央のシンボルピラミッド。寝たきりの入所者もここでは「空」を感じることができる。

高齢社会の到来を目前に、地域福祉の充実を目指した積極的な施策を展開し、全国から注目を集める鷹巣町。福祉の時代をリードするこの町の原動力は、そこに住む町民自身による意思決定と実践能力にありました。

## 住民決定による新しい地域福祉の実現（鷹巣町）

### 在宅願望の生む

#### 高齢社会の現状

平成12年5月1日現在で25・66%。本県を象徴するよつな、全国平均の16・5%を遥かに上回る高齢化率を示す鷹巣町。この町で住民が行政の舵取りを委ねたのは、「福祉のまちづくり」を公約に掲げた当時42歳の岩川現町長でした。

岩川町長は平成3年4月の就任後、町内の世帯一軒一軒を訪ねる中で、昼夜付きつきりで介護にあたる家族や、高齢者を介護する高齢者など、介護する側も、される側も互いに大変な苦労を強いられている実態を目の当たりにされました。多くの高齢者は住み慣れた自分の家で生活したいと思っています。しかし、町には在宅で安心して住み続けられる環境基盤が整っておら

ず、町民の行政に対する期待を痛切に感じたと言われます。

町では「理想の福祉とはどうあるべきか」を検討しようと、平成4年に学識経験者、福祉関係者等15名からなる「福祉のまちづくり懇話会」を発足。懇話会の答申は「福祉の専門家が計画を作ってもそこに住む町民が自分の問題として捉えないと、この問題の解決はあり得ない。」というものでした。

### 福祉を考える

#### 住民グループの発足

町の呼びかけにより、高齢者福祉に関心を持つ約60名の町民が参画し、福祉の「ワーキンググループ」が発足しました。参加者はもちろんボランティアです。

ワーキンググループでは、最初に町の高齢者の実態を把握するため、実際に在宅介護

を受けている家庭を訪問。本人や家族の希望・意見など「生の声」を聞くことにより、介護者がいかに心細さや不安を感じているかを肌で感じながら、様々な問題を認識していききました。これらを持ち帰った後、できることは自分たちで解決方法を探り、予算化の必要なことについては町に提言します。また、活動の高まりとともに先進地の北欧デンマークには11年までに120人近い住民が訪問し研修を受けています。

こうした取り組みの中からホームヘルパー・訪問看護婦等スタッフの大幅な増員や、全国に先駆けて全町に展開されている24時間巡回型ホームヘルパーサービスなど、レベルの高いソフト事業が次々と提案・実施され、次第に町の福祉の方向性・指針が形成されていきました。

名の署名を集めた運動にもかかわらず、2度に渡って予算案は否決。再度提出された計画は、中核施設となる在宅複合型施設を、「終(つい)の棲家(すみか)」としての高齢者施設ではなく、高齢者や介護者の「在宅での生活を援助するための拠点施設」と位置づけた「ケアタウン計画」へと練り直されました。この計画も一度は否決となったものの、住民の熱意はついに議会を動かし、平成8年6月、予算案可決とともに建設に「コーサイン」が出されます。

### 町の福祉の中核 「ケアタウンたかのす」

町は建設途中に1ユニット(8個室)をモデルルームとして一般公開、これを町民から成る「ケアタウン探検隊」が視察し、90項目から成る意見・要望を提出しました。建設ではその内容の95%を取り入れるなど、柔軟に計画を修正していきます。こうして平成11年4月10日、「ケアタウンたかのす」は構想から6年にも及ぶ歳月を経て、多くの町民の参画と支援により、待望のオープンを迎えました。



1ユニットに1つ配置される、明るいキッチン付リビング。

お披露目には、約2,600人の町民が訪れたと言います。町のほぼ中央部に位置する「ケアタウンたかのす」は、

80床の老人保健施設・30床のショートステイを中心にした、デイサービス・在宅介護支援センターなどの複合施設として、「住民の住まい」をベースとした在宅支援中核施設と位置付けられています。したがって、8人雑居で食事から排泄に至るまでマニュアル化された施設側の利便性重視のこれまでのものとは異なり、プライバシーの尊重は勿論、一人一人の生活を大切に、個別のケアが徹底される「全個室」、さらに一切のプログラムを廃止し、食事は好きな時に好きな場所で食べられ、

睡眠・排泄からリハビリに至るまで、入所者それぞれの生活リズムを最大限に尊重した運営が行われています。周辺には現在、高齢者や障害者が自立した生活を送るためのバリアフリー住宅の計画を進めています。これにより、この拠点を中核とした、「総合福祉エリア」が構築されることとなります。

### 住民・行政連携の パートナーシップ

全国屈指と言われる在宅サービスや施設の充実に目を奪われがちですが、鷹巣町の福祉施策における最大の

特徴は、住民主導による企画運営にあります。それも、単に行政が引いたレールに町民が乗るものではなく、町民こそが町の指針を定める主体であり、その義務と責任を負おうとするものです。

その中で大きな役割を占めているのが、ワーキンググループの活動です。自分たちの町をどうしたいのか、そのために自分たちは何

をすべきかを考え、行動する実戦部隊であり、行政と連携して問題解決を探る良きパートナーでもあります。これまでの福祉のみにとどまらず、縄文遺跡を守るためのワーキンググループや資源リサイクル問題、商業地再生のための都市計画づくり、町営住宅の建設、農作物研究など、より広範囲な課題に対して様々なワーキンググループが形成され、参加者は現在約170名と年々増えており、行政への関心の高さをうかがわせます。多面的に展開されていく住民参加のまちづくりは今後も注目を集めそうです。



入口から続く通路は町民の作品を飾ったギャラリーとなっている。